お屋敷ランデブー！

はのん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
お屋敷ランデブー！

【Ｎコード】
Ｎ６７３１Ｗ

【作者名】
はのん

【あらすじ】
これは、中学校まで施設で育った女の子のお話。性格はどちらかというとお気楽で、いつもニコニコ元気。そんな彼女に訪れる二つの選択肢。彼女が選ぶのは一体どっち？

運命の足音。

私、相川千由里（あいかわ ちゆり）は、物心つく前から施設で生活をしていた。
比較的、周りの子より楽観的な性格のおかげで、両親のいない寂しさなどは感じずに過ごせていた。
ここの施設はちょっと貧乏みたいだったけど、ちゃんと中学まで通わせてくれて、無事に卒業することができた。

私は、高校には行かないで、もう働いてもいいって思ってるんだけど、先生たちは猛反対。
高校まではちゃんと行かなきゃだめだって言ってくれている。お金に困っているのに、みんな私のために必死で頑張ってくれている。
私はいい人たちに巡り会えて本当に幸せだった。
だから、そう言ってくれてる先生たちのために、私もアルバイトをしながら高校に通おうと思ってた。

だけど・・・

そんな私に、神様は突然大胆な選択肢を与えたのだった。

昔の恩。

高校入学を目前に控えたある日、私は澪(みお)先生に呼び出された。

『千由里ちゃん、ちょっといいかしら？』

「うん、いいよ」

施設の先生みんなと仲が良かったけど、特に仲が良かったのはこの澪先生。

どちらかというと、先生というよりお母さんみたいな感じだった。

だから私はいつもの雑談だと思って彼女の話を聞きに行った。

けど、この話が私の人生を大きく分ける選択だった。

『千由里ちゃん。あなた藤沢(ふじさわ)花里奈(かりな)ちゃんっていう子知ってるかしら？』

「藤沢・・・？あ！花里奈ちゃんのこと？知ってるよ！」

そう言うと澪先生は少し驚いたように見えた。

『その子とはいつ知り合ったの？』

「えっとねー・・・たしか数年前に・・」

数年前、施設でピクニックに行った先で、転んで怪我をしていた同い年くらいの女の子に出会った。

その女の子が花里奈ちゃんだった。少し色素の抜けた茶色い髪の毛

で、大きな瞳が印象的な女の子だったことを覚えている。
私はリュックの中にあった絆創膏を、彼女の怪我した膝に貼ってあげたんだけど、相当痛かったのか泣きじゃくっていた。
そこで私は、おやつにと持ってきた大好きな甘いチョコレートをあげたの。
楽しみにしておいたものを他人にあげてしまうのは少し惜しい気がしたけど、受け取った花里奈ちゃんはすごく笑顔だったから私も嬉しかった。

「・・・ということです」

『ああ、そういうことだったの』

「それで、花里奈ちゃんがどうかしたの？」

『うん。実はね、花里奈ちゃんの家の方があなたを引き取りたいって連絡がきたの。』

「ええっ！？本当に？なんで？」

『助けてくれた恩を返したいそうよ。あなたに本当に感謝してるみたいだったわ。花里奈ちゃん、ずっとお礼をしようと思っててくれたみたいなんだけど、何をしたらいいかずっと考えてたみたいよ。それで、今回、ここの施設が経営危機なことを知ってあなたを引き取ることに決めたそうなの。高校にももちろん行かせてくれるって』

「嘘ー！あたしを！？あ、でも、澪先生たち私のために資金集め頑

張ってくれてたでしょ？なのに私がいなくなっちゃっていいの？」

私は、先生たちが昼夜問わず一生懸命資金集めをしてくれていたことを知ってる。

その苦労を無駄にして良いわけがない。

『集めたお金はほかに回せばいい話よ。それよりも私たちはあなたに苦労をかけたくないの。勉強が本職の学生にアルバイトさせながら学校通わすなんてなんてだめよ』

「先生・・・。あ、でも、花里奈ちゃんの家は本当に大丈夫なの？私を高校に入れてくれるなんて大変じゃない？」

他人の子を引き取って、学費を快く払ってくれるなんてお金持ちくらいにしか真似できないよ。

『それがね、そんなに大変じゃないみたい』

「え？どういうこと？」

いきなり澪先生の顔が明るくなる。

『あなた本当にラッキーよ！花里奈ちゃんの家は超ーーーーーーーーお金持ち！！だから、あなたはアルバイトしながら学校に行かなくてもいいのよ』

「え、え？えーーー！！？？」

なぜ？なぜなの？そんなことしてくれるほど恩を着せた覚えはないわよー。

ただ絆創膏を貼ってチョコあげただけなのに。
最初はそう驚いたけど、いつもの楽観虫が出てきた。

「あ、でも、本当にラッキーね。私が出て行けばここも少しは楽になるだろうし、あたしは高校に通える。まさに一石二鳥じゃない。決めた！私、花里奈ちゃんの家にお世話になる！」

『まあ！相変わらずあっさりさっぱりな性格ねえ。ま、そこが千由里ちゃんらしいんだけど。あたしはちょっと寂しいなあー』

「えー？澪先生、私に出て行ってほしくないんだ。あはは！超ラッキーだねとか言ってたのに。あはは！」

『あはは！じゃないわよ！そりゃ、あなたが苦労しなくて済むならそれが一番だけど、どれだけあなたと暮らしてきたと思ってるのよ。なんか、もう娘を嫁にやる気分よ。なのにあなたって子は！あーあ。私のこともきっとすぐに、あっさり忘れられちゃうのかなあ』

「はは、大丈夫。澪先生のことは絶対忘れないから。心配しないで」

『本当に？・・・期待はしないわ』

先生の気持ちはよく分かる。私も同じだもん。だけど私はここを出て行くことに決めた。
中学を卒業したから、次は施設も卒業しなくちゃ。

『それじゃ、すぐに藤沢さんに連絡を入れておくから。そしたらきっと明日には花里奈ちゃんとそのお連れの方が来てくれると思うから』

「うん、分かった」

そして、明日、私はもう一つの決断を下すことになるのだった。

庶民生活とお嬢様生活。

もうすぐ花里奈ちゃんがやってくる。
お金持ちってことは、やっぱり立派な車で来たりするのかなあ？
そんなどうでもいいことを考えながら、私は自室の窓辺に頬杖をしていた。
そして、ふと昨日の出来事を思い出した。
昨日、澪先生と交わした約束。
『大丈夫。澪先生のことは絶対忘れないから。心配しないで』
この言葉は嘘じゃない。嘘じゃないし、この言葉を口にした時、少しの未練が私の心にあった。
まだここにいたい、みんなと離れるのは寂しいって。
でも、一晩寝たら自分でも驚くくらい吹っ切れていた。
早く新しい生活を始めたいって思ってる自分がここにいる。
「あはは・・・私の性格ってほんとポジティブだ」
自分のことながら笑ってしまう。
昔から不思議なくらい、寂しいとか、悲しいという感情に苦しめられたことがない。
思ったとしてもそれはほんの一瞬。今日みたいに寝たらすっきりしちゃうの。
だから、今まで泣いた記憶もない。私、涙でないのかな。なんて思ったりもするくらい。

私って楽な性格だなーなんて思っていたら、目の前に黒い、いかにも高級車って感じのセダン車が止まった。

それとと同時に私を呼ぶ声が聞こえる。

『千由里ちゃーん！花里奈ちゃんが来たわよー！』

「はーい」

急いで玄関に向かうとそこにはとってもきれいな女の子と、黒いスーツを着た男の人が立っていた。

『久しぶりね、千由里ちゃん！』

「花里奈ちゃん？」

目の前に立っているお人形のような女の子を思わず凝視してしまった。

『まさか、私のこと覚えてない・・・とか？』

私は頭をぶんぶんと横に振る。

「ううん！覚えてるよ。なんか、すっかり変わっちゃって・・あ！もちろん良い意味でね！」

『ふふ。ありがとう。私、あなたには本当に感謝してるの。だから今回の件、引き受けてくれて本当に嬉しいわ。あ、こちらは私の執事兼、運転手の倉木次云（くらきじうん）』

「初めまして。その節は、お嬢様をお助けいただきありがとうございました」

『いえ、そんな』

大したことをしていないのに、そこまでされると逆に恥ずかしくなってくる。

それにしても彼女の話し方、振る舞いは本当に洗練されたお嬢様のものだった。
でも、それは決して鼻にかけたようではなくて、明るくて気っ風の良い感じだった。

それから私たちは、澪先生と倉木さんも含め４人で今後のことを話し合った。

まず口を開いたのは花里奈ちゃんだった。

『あのね、あなたにはまず私と同じ高校に来るか、普通の高校に行くかを決めてもらいたいの』

「と、言うと？」

『私が通うことになる聖女学園は、いわゆるお嬢様学校。それともう一つは公立の明和高等学校』

「花里奈ちゃんと同じところが良いけど、私は明和高校にするよ」

お嬢様学校なんてきっと、施設育ちの私には場違い。
きっと行ったら気後れしてしまうような学校なんだと思う。

『わかったわ。でもね、私の家からだとどちらの学校も同じ距離なんだけど、あなたが住むところから明和に行くのはちょっと遠いのよね。大丈夫かしら？』

え、え、ちょっと待った。今なんて？？

「ねえ、私、花里奈ちゃんと同じ家に住むんじゃないの？」

『ええ。ごめんなさい、それを先に言うべきだったわ。あなたに住んでもらうところは私の家の別荘よ』

「『別荘！？』」

と、澪先生と私で声をそろえて叫んだ。

『あ・・・ごめんなさい、大きな声を出してしまって。では、千由里ちゃんはその別荘で1人で暮らすことになるんですか？』

『いいえ、千由里ちゃんには5人の護衛をつけるわ』

「『護衛！？・・・・・すいません・・・』」

またまた大声を出してしまった私たちを見て、花里奈ちゃんはいいのよと微笑み、

倉木さんも少し笑ってるみたいだった。

『あのね、別に護衛といってもそんなに堅苦しいものじゃないのよ？この話は後でってことで良いかしら？』

「うん。それで別荘のことだけど・・・」

『あ、そうだったわね。それで、明和の方に千由里ちゃんは行きたいみたいだけど、さっき行った通り少し遠いのよ。もちろん運転手は付けてあげられるけど、高校での部活動や修学旅行、友達と外で遊ぶということはできないの』

「え？どうして？？」

やっぱりお金持ちだけど、そこまでは出来ないのかな？
部活も修学旅行はきっとすごくお金かかるだろうし、引き取ってもらってる身分で友達と遊びに出かけるなんて、贅沢だもんね。

『千由里ちゃんよく聞いてね』

花里奈ちゃんは突然真剣な顔になった。
何を言われるんだろう？

『藤沢家にはね、藤沢家のルールがあるの』

「ルール？」

『そう。これは私の祖父、紫円（しえん）おじいさまが造られたものだから絶対守らなくちゃいけないものなのよ』

「うん。それで、その内容は？」

『その内容は、主に護衛の者に向けられたものなんだけど・・・』

それは、こういう内容だった。

一、藤沢家における女、子供に怪我を負わすことを禁ず。
二、己の仕事を全うすべし。
三、藤沢家におけるもの藤沢紫円に逆らうべからず。

これを犯すものは処罰に処す。

『だからね、護衛の人たちが処罰にさせられないように、私たちは怪我しないように気をつけなければならないの。それで、さっき私が言ったことは守ってほしいの。無茶なことを言ってるのは分かってるけど、うちがあなたを引き取るんだからあなたも藤沢家の一員。責任を持って預からせていただくためにもこのルールには従ってもらいたいのよ』

「そっかあ。確かに厳しいルールだけど、すごく大切にしてもらえる気がする。分かった、そのルール守るように頑張るね」

ただ、私を縛るためのルールじゃない。守ってくれるためのルール。ちゃんと守らなくちゃ。

『本当ー？あなたならこっそり友達と遊びに行っちゃいそうで、私怖いわあ』

「何よー先生。私のこと信用してないの？」

『うーん、どうかなあ。ふふ』

「もう！花里奈ちゃん、私大丈夫だから！」

『ありがとう、千由里ちゃん。でも、私の行く学校にすれば友達と遊ぶことは除いて、部活動や修学旅行は行けるのよ？』

「え、どうして？」

『聖女学園には藤沢家の人間が多く働いてるからなの。だから、ちゃんとその人たちの目の入る範囲にいるから特別に許可されているの。どうする？今ならまだ変えられるけど？』

それでも、私は首を横に振った。

だって、学校だけの付き合いになっても自分の目方にあう友達を作りたいから。

「私は、明和でいいよ。学校だけの友達でも構わないから」

『うん。あなたがそう言うなら無理強いしないわ。決まりね』

こうして私は庶民生活とお嬢様生活の二つをすることになったのだった。

5人の護衛。

私は話に一段落ついたところで、気になっていたことを聞いた。

「ねえ、花里奈ちゃん。さっき言ってた5人の護衛って？」

『ああ、そうそう、そのことを話さなきゃね。私にも護衛が5人ついてるんだけど、その内の一人が彼、倉木さん』

そう紹介された倉木さんは折り目正しくお辞儀をした。

私も思わず小さく礼をした。

『藤沢家にいる結婚前の女には、代々5人の護衛をつけているの。本家の私はもちろん、分家の方々もね』

「そんな大それたもの私にはもったいないよ。だいたい、赤の他人なんだし」

『ううん。もうこれからあなたは私達の家族よ。何の遠慮も必要ないわ』

家族・・・。

施設のみんなも私の家族。

また家族が増えるんだ。

そういう考えが私の気持ちを前向きにする。

「そっか、いいね家族って」

『ええ。だから、あなたの護衛と仲良くしてあげてね』

「うん、わかった。それで、護衛さんって普段は何をしてるの？」

私が学校に行ってる間、まさかついてくるはずがない。普通の学校なんだからそんなことしたら目立ってしまうから。

『うん。護衛５人はそれぞれに本業があるの。護衛って言うのはただ一言でまとめた言い方なのよ』

「へーそうなんだあ」

『護衛はねそれぞれ決まった仕事があって、倉木さんと同じで運転手がその一つ。他は執事、コック、スタイリスト、保険医。この５人が護衛も担っているから、まとめて護衛って呼んでるの。まあ、彼みたいに運転手と執事を兼ねてる人もいるわ』

「『・・・。』」

『お二人ともどうかしたの？』

どうかするわよー！自分付きの運転手だけでもびっくりなのに、コックにスタイリストですって！？

『千由里ちゃん・・・私、あなたの代わりに藤沢さんの家に行きたくなっちゃたわ』

「先生、今は冗談やめて。頭が追いつかないの」

心ここにあらずの私に花里奈ちゃんはつぶやいた。

『まあ、その内慣れるわ』

「・・・」

それからしばらくして花里奈ちゃんと倉木さんは帰って行った。

私は入学式の日まで施設にいて、登校日1日目が終わると藤沢家に帰る、ということになった。

花里奈ちゃんは帰り際にメモを私に渡した。

どうやら授業が終わると例の運転手さんが迎えに来てくれるらしい。でも、学校まで迎えに行くといろいろと面倒なことになるらしいので、メモに書いてある場所まで来てほしいとのことだった。

あー何か緊張しちゃうなあ。

新しい生活。

暖かい日の差す春の朝。私は出会いと別れの間に立っていた。

『さあ、いってらっしゃい！戻って来たくなったらいつでも歓迎するからね』

「ありがとう先生。今まで本当にありがとう。みんなもまたね。ありがとう」

昨日入学式を終えて、施設のみんながお別れのパーティーをしてくれた。

今日から高校生活が始まる。

そして、今日から藤沢家に帰る。

『千由里ちゃん、おはよう！』

この子の名前は倉橋咲（くらはしさき）ちゃん。

「咲ちゃん、おはよう」

私の前の席に座っている子。

やたらと後ろを振り返っては、話しかけてくる。

『千由里ー！咲ー！おはよー！！』

あの子は東雲雪（しののめゆき）ちゃん。

『雪ちゃんおはよー！』

「おはよう」

咲ちゃんの隣の席の子である。
他にもたくさんの子に『おはよう』と言われた。

そして、本日最後の『おはよう』が左隣から聞こえてくる。

『おはよっ、相川』

「野上くん、おはよう」

彼は私の隣の席の人だ。
名前は野上南千（のがみなち）くん。

『ったく、今日も相変わらず…だな？』

「…？」

何が相変わらずなのか私には分からなかったけど、
彼は不満そうな顔で私を見てくる。

『ま、いいや。今日も1日よろしくな！』

「…うん」

彼はよく話しかけてきてくれた。今日の最後の授業の後半部分はかなりのマシンガントークだった。だけど私は右から左に聞き流して

いた。
とっても失礼なことだけど、今の私には真面目に聞いてあげるほどの余裕がなかった。
だって、まもなく高校生活1日目が終わってしまうのだから。

キーンコーンカーンコーン♪

終業の鐘が鳴った。
ついにこの時が来た。

私は、花里奈ちゃんにもらったメモを取り出して深呼吸をする。
学校の終わる時間通りに待ってるって言ってたから、
きっともうここに運転手さんがいるはず。
けど、担任の話が長引いたから遅刻しそう。
走らなくちゃ間に合いそうもない。
私は地図を握りしめて駆け出した。

「はあ、はあ、はあ・・・。あれかな？」

車が少し見えた所くらいで、息を整えるために走るのをやめた。
ゆっくり近づくと車のドアが開き、スーツを着た男性がこちらにやって来る。

「・・・・」

私は無表情で近づいてくる彼に、なぜか体を強ばらせた。

しかし、目の前までやって来た男性は、気遣わしげに声をかけてきた。

『息…切れてますね。もしかして、走って来られたんですか？』

「っえ？」

だいぶ息を整えて来たつもりだったのに気づかれてしまった。

「ちょっと遅れそうだったので・・・」

『そうでしたか、走らせてしまって申し訳ありません』

彼は申し訳なさそうに謝罪をする。

べつに、走るくらい何の問題もないのに。

「あの、走るくらい大したことありませんから・・・顔、あげてください」

そう言うと、彼は慌てたように顔をあげた。

『滅相もございません！紫円様がお預かりされているお嬢様を慌てさせるなど・・・！』

「いや、べつにあなたのせいじゃないし！それに、こんな事してたら紫円様との時間に遅れてしまいますから」

何とか彼をなだめると、彼はもう一言謝って私を車へ案内した。

「はあ・・・」

車に乗るなり自然にため息が出てしまった。

『どうしました？お嬢様』

彼は車を走らせながら気遣ってくる。

しかし、その気遣いの言葉の中にも私の悩みの種が含まれていた。

「お嬢様・・・ですか」

『何か仰いましたか？』

「あ、いえ。・・・そういえばまだお名前を聞いてなかったなって思って！」

『そうでしたね。これは失礼しました。私の名は黒枝神威（くろえだ かむい）と申します』

「神威さんでですか。かっこいい名前ですね」

『そうですか？ありがとうございます』

「ふふっ。私の名前は知ってるかもしれないですけど、相川千由里です。よろしくお願いします」

『存じております。千由里様』

「うーん。その様って言うのやめてください。せめてさんで私も神威さんって呼びますから」

『はい、では千由里さんで』

「うん。その方がしっくりくる！ありがとう」

何か思ってたより緊張せずに楽しい生活が送れそうな気がしてきた。

私のおじいさま。

神威さんの運転する車に揺られ数十分後。

「こんなところに家があるの・・・？」

車の窓ガラスから見える景色は、高いビルやマンションたちを通り越し
辺りは木々ばかりで、一見すると森のようなところへ連れて行かれた。

「・・・」

私は一抹の不安を覚えたが、未知の世界への期待の方が勝った。

時々木の陰から湖のようなものも見えて、本当に別の世界に来てしまったようだった。
すると、何やら建物らしきものが見えてきた。

「あれが家かな？・・・・家・・じゃない！嘘・・・何あれ」

『あれがこれから千由里さんに住んでいただくお屋敷です。お気に召して頂けましたか？』

「お屋敷！？お気に召すって・・お金持ちだってことは聞いてたけど、これは・・・」

もう何の言葉も出なかった。
ディズニーランドのシンデレラ城・・・とまではいかないけど、立

派な建築物だった。
緑の森の中に堂々と建っている。私はいつの間にか眠ってしまって、夢を見ているんじゃないのかと思い、頬をひねった。

「痛い・・・」

私が呆然と立ちつくしていると、神威さんが困った顔してこちらを見ている。

『このような小さな屋敷ですまない、と紫円様が仰っていましたが・・・千由里さん、やはりお気に召しませんでしたか？』

「！？っななな、何言ってるんですか！？こんな立派なところに住まわせてくれるなんて感謝です！」

『本当ですか？良かった、ありがとうございます。そのお言葉、紫円様にお伝えしてください。きっと、喜んでくれますから』

「はい！」

見た目通り中も広い！広すぎるーー！！
今はまだ、神威さんに案内されるがままになってるから、きっと一人じゃお手洗いも行けないかも。

お屋敷の中はすごく手入れが行き届いていて、どこもかしこもピカピカ。
それに、初めて見るものばかりだからよそ見ばかりしてしまう。

ドン！

「っあ！」

足元を見ていなかったせいで、段差に気づかずつまずいてしまった。
転ぶ！・・・・・・あれ？

『千由里さん、大丈夫ですか？お怪我はありませんか？』

一瞬何が起こったのか分からなかった。
三秒くらいしてから状況を把握して、私は赤面する。

神威さんに抱き留められれる！？

「わわわっ！ごめんなさい！！すいません！ついよそ見してて・・
怪我してませんからっ」

動揺に動揺しあわてふためいた。

『ふふ、そうですか。良かった。それにしても、見かけによらず・・
・』

「え？何か言いました？」

最後の方が声が小さくて聞き取れなかった。

『いえ、何でもありません。さあ、こちらです。紫円様がここでお
待ちです。』

「ここに私のおじいさまがいらっしゃるのね」

ギイ・・

「わあ！」

そこは、思わず声が出てしまうほどきらびやかなシャンデリアでいっぱいだった。

目が慣れるのに少し時間がかかるほど。

そして、ようやく誰かがいるのが分かった。

この人こそが、私を引き取ってくれた人。藤沢紫円様だ。

様、と私が呼ぶのはこの人だけ。

自分がそう呼ばれたり、彼以外に使うのは抵抗あるけど、この人は特別。

『よく来たな。千由里。待っていたぞ』

「紫円様。私を引き取ってくださり大変感謝してます。それに、こんな大きなお屋敷までいただけて、本当にありがとうございます。どうぞ、これからよろしくお願いします！」

『うむ。元気の良い娘だ。感心感心。しかし、これからわしのことは紫円様、ではなくおじいさまと呼んでくれないか？花里奈もそうしておるからな。孫が増えてこれから楽しくなるのう』

「はい、おじいさま！」

『おお！それでよい。これからはそれで頼むぞ。ところで花里奈からはうちのルールを聞いたかな？』

「はい。聞いてます。私、約束はちゃんと守りますから！」

『いい子だ。その調子で頼むぞ。それからな、わしは基本的に本家に住んでおる。何か困ったことがあればわしに連絡を取るがいい。黒枝がわしの連絡先を知っているから、彼に聞くといい』

「はい。わかりました」

『うむ。それではわしは退散しよう』

「ありがとうございました」

『ああ、そうそう。黒枝、しっかり千由里にあいつらを紹介させるのだぞ？』

『・・・はい、承知しております』

一瞬、神威さんの顔が曇ったように見えた。
たぶん、私の護衛の人たちのことなんだろうけど・・・
何か心配なことでも？？
まあ、いっか。なるようになる！

おじいさまが帰ると神威さんがほかの部屋に案内してくれた。

『これからあなたの護衛を紹介いたします。先に申しておきますが、私もあなたの護衛の一人ですので。よろしくお願いしますね？』

「はい、こちらこそ！」

一体どんな人なんだろうと期待に胸ふくらませていた。

神威さん、とっても親切だからみんないい人なんだろうな・・
なんて、考えていた矢先。
さっき、ふいに見せた少し暗い表情で神威さんが声をかけてきた。
『あの・・その残り４人のあなたの護衛のことなんですが・・・』
「はい、なんでしょう」
『何というか、クセのあるものばかりなんです。４人とも誠心誠意あなたをお守りします・・・が・・』
何ともいいにくい内容らしいことを察したけど、まあ、なんとかなるよ。
「大丈夫ですよ、私なら。悪い人ではないんでしょう?」
『ええ、もちろん。あなたに決して害は与えません。大変言いにくいことなのですが、人間性に問題のある奴らが少々おりまして・・・』
「大丈夫ですって！私、人見知りはしませんから。うまくやっていけますよ、きっと」
『・・・・。そうですか、分かりました。では行きましょう』
「はい！」
これから私を待ち受ける波瀾万丈劇！何も知らない私はその舞台に呑気に駆け上がった。

強者揃い。

私は神威さんに案内されて、ある大きな扉の前までやってきていた。
この扉の向こうに新しい出会いが待っている。
期待が膨らむ私を横目に、神威さんがつぶやく。

『心の準備はよろしいですか？』

何気ない一言だったのだろう。けれど、今までの彼の発言から推測して、
『この先どんな光景が待っていようとも、取り乱さない心の準備はよろしいですか？』
と言う意味に聞こえた。

「神威さん。私より、あなたの方が不安なんでしょうね、きっと」

『えっ？』

「いえ、何でもないんです。私は大丈夫ですから入りましょう？」

『かしこまりました』

神威さんは、ガッと両開きの扉に手をかけ思い切り押し開けた。

そこに見たものは・・・・・

『鸞ちゃーん！こっちこっちぃー！！』

『てめぇ、そこから一歩も動くなよ！ぬあ！動くなって言ってんだろ！！』

『動かなかったら鬼ごっこにならないじゃん。鬼さんこーちら、手の鳴る方へ！』

『くそっ！瑞雲、ちょこまかとっ！くそっ』

『よくもまあ、飽きもせず毎日毎日騒がしい人たちだなあ』

『摩周、お前も人のこと言えたもんじゃないと思うけど』

『え、何それ精華？一体どういう意味？』

『本気で言ってるのか、それ。神威の扱い方に決まってるだろ？お前、また昨日飲みつぶれて、夜中に神威を呼び出したらしいな。いい加減にしろよ』

『別にいーでしょ。あいつ、くそがつくほど真面目だし、絶対頼み聞いてくれるから』

『お前は、気を遣うってことを知らないのか』

『うわーつかまっちゃったー。よーし、んじゃ次はっと・・・ふふふ』

『ねえ、精華。瑞雲がすっごい気持ち悪い目でこっち見てんだけど』

『摩周！覚悟しろーい！！』

『おーい！何で俺だけ！？お前の視界には精華は入ってないの？？』

『問答無用！！！』

『やはり、追いかけられると逃げたくなるものなんだな・・』

『何冷静に語ってんの精華！・・うあ！！』

ドカッ！ガッシャーン！！

『あーあ摩周、前見て逃げないからだよ、まったく。って、ん？神威君？とその可愛い女の子は・・・』

ようやく神威さんと私の存在に気が付いてくれたみたい。
今までの彼らの様子を呆然と見つめていた私に声をかけてくる。

『ご感想は？』

「楽しくなりそうです」

私は出来る限り、未来を想像しないようにすることを決めた。

十人十色。

扉を開く前のドキドキとワクワク。
神威さんが変なこと言うからちょっと心配したけど、
想像とはちょっと違った意味で驚いただけで、何となく楽しくなりそうな予感がした。

場が落ち着いたのを見計らって神威さんが口を開いた。

『こちらにおられる方が相川千由里さんだ。みんなよろしく頼むぞ、本当に。』

「・・・（神威さんってば・・・）。相川千由里です。今日からお世話になります、よろしくお願いします」

『こっちらこそ！僕、小緑瑞雲（こみどりみくも）。瑞雲って呼んでね、千由里ちゃん！』

「よろしく」

なんだかすごく可愛い男の子。年も近いみたいだし仲良くなれそう。

『あ、ちなみに僕、君のスタイリスト担当だから！洋服選びに、髪結いまで全部僕に任せて』

スタイリスト？
ああ、そういえば・・

『護衛はねそれぞれ決まった仕事があって、倉木さんと同じで運転手がその一つ。他は執事、コック、スタイリスト、保険医。この5人が護衛も担っているから、まとめて護衛って呼んでるの。まあ、彼みたいに運転手と執事を兼ねてる人もいるわ』

って、花里奈ちゃん言ってたっけ。

『次は俺。灰咲鸞鳳(はいざきらんぽう)だ、あんたの保険医。ったく、保険医なんて俺一人いりゃ十分なのにな』

「はあ・・」

見た目で人を判断しちゃだめなんだろうけど、保険医だったらもっと優しそうな人が良かったなと思ってしまう。

『鸞、その愚痴飽きましたー。っと、はい！次は俺ー。紺野摩周(こんのましゅう)です。よろしくねー。君のコックを担当するから、何か要望があったら俺に何なりと言ってね』

「はい、よろしくお願いします」

彼はフレンドリーな人。というか、爛漫という言葉が似合う人。

『俺で最後、か。銀澤精華(ぎんざわせいか)。あなたの執事担当です、よろしく』

「こちらこそ」

彼は、すごく綺麗な人。みんなかっこいいんだけど、彼は少し違った魅力を持っている。

大人で落ち着いてて、でもどこか冷たい感じもする。

これから私、うまくやっていけるかな？
ちょっとクセのある人たちだけど、仲良くやっていかなくちゃ。
養子を受け入れてくれた藤沢さん家族のために、そして自分のために

『はい、では千由里さん。これからあなたのお部屋にご案内します。
みんなは各自の仕事に取りかかってくれ』

どうやらこの五人の護衛のリーダーは神威さんのよう。
他の四人は何の不満も漏らすことなく散らばっていった。

『では、行きましょうか』

「はい」

『お部屋では、今後の千由里さんの生活についてのお話をさせて頂きます。学校のことや、ここでの暮らし方などですかね』

「暮らし方？」

『まあ、主に護衛との付き合い方と言うことですね。この家には千由里さん以外男しかいませんので、あなたに守ってもらいたい約束事があるのです』

「そうですか。って・・・え、あの、・・・え？女性の方はいないんですか？」

『まあ、昼間は家政婦の方が数人来られますが、この家に寝泊まりするのはあなたと護衛だけです』

「は、はあ。そうですか」

『ですので、その辺について私と約束があるんです。守ってもらえますか？』

「ええ、もちろんです」

『ありがとうございます。さあ、着きました。ここがあなたのお部屋です』

「・・・・・・・」

部屋の扉を目にしただけで、思わず呆然としてしまった。
言葉も出ないくらい、豪華な扉。
手で触れて良いものなのか躊躇うほど。

『どうかしましたか？』

「いえ、とても立派な扉なので少し驚きました」

『そうですか。それでは中もご覧ください』

今日、何回扉を開けてきたんだろう。
その中でも一番緊張する瞬間だった。

お約束条項。

女の子なら誰でも、一度はこんな部屋に住んでみたいと願うと思う。
ひらひらフリルいっぱいのベッド、淡いピンク色の絨毯。
大きなクローゼットに可愛いアンティークチェア。
それに何とも広い広い広ーい！！

「広すぎませんか？」

『そうでしょうか？これでも小さいのではないかと紫円様とお話していたのですが・・』

「いやいやいや。8畳もあれば十分ですって」

『8畳ですか！？・・はあ・・8畳ともなればここのお手洗い場の広さですね』

「確か施設のは1畳くらいだった・・・」

『何か仰いましたか？』

「い、いえっ！私にしてみれば一人でこの部屋は広すぎて持て余しそうです」

『それでは私とお部屋をご一緒にしましょうか？』

「ええっ！？」

『冗談です』

「・・・」

怖いよー神威さん！笑顔で冗談が一番きついのよー！！

『それでは気を取り直して、先ほどお話ししたお約束の件についてですが』

「ああ、はい約束ですね。どんなのですか？」

私たちは適当な場所に腰を下ろした。

『とりあえず、箇条書きにしてみたのでこれを読んでください』

「はい。えーっと・・一、護衛なしでの外出はしないでください。二、護衛の部屋には立ち入らないようにしてください。また、ご自身のお部屋にも護衛を入れることの無いようにしてください。三、学校は終わり次第車まで速やかにお越しください」

『はい。守って頂けますか？』

「ええ。これくらいなら。もっと難しいこと言われるのかと思いました」

『本当に守れますね？』

「え？・・・はい。何でですか？」

『いえ、何でもありません。では契約の証として・・』

そう言うと、神威さんはおもむろに小指を差し出した。

「指切り、ですか？」

『はい。約束をするときは指切りが定石でしょう』

「あ、そうですね」

そして私と神威さんは小指を結んで、がっちり約束をした。

「っあ！」

『どうかしましたか？』

「も、もし私が約束を破ったらどうなるのか聞いてませんでした！」

『そうですね。それはとても重要なことです』

「え！ど、どうなるんですか？？」

『それは・・・破ってからのお楽しみです』

笑顔で言い放つ神威さん。

私は全身から血の気が引いたのだった。

本音。

ここに来てまだ二日しか経っていないのに、もう一週間くらいいるみたいな気分。
まるでお嬢様のような生活に、緊張しまくって気が滅入る・・・

だから、この大きなお屋敷での生活以外、
つまり、学校生活だけは普通の女の子に戻れる場所だった。
お約束通り神威さんに学校の近くまで送り届けてもらう。

『千由里さん、お気を付けて行ってらっしゃいませ』

「ありがとう。行ってきます」

車の扉を開けるのも閉めるのも、ドラマチックに彼がしてくれる。
朝からなんか、気恥ずかしい。
運転席に戻った神威さんに手を振ると、彼は微笑んで
ブーンというエンジン音とともにお屋敷に帰っていった。

「さてと、やーっと伸び伸び出来るわー！」

私は背伸びを一つして学校へと向かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6731w/

お屋敷ランデブー！

2011年11月24日14時47分発行